

菟道稚郎子の一考察

A Study of Folklore Uji-no-waki-iratsuko

Keywords : the Emperor Nintoku, the Crown Prince Uji-no-waki-iratsuko, suicide by drowning, Bon-ten Feast, O-nusa Feast, the Wani clan

キーワード：仁徳天皇、菟道稚郎子太子、入水、梵天祀り、大幣祀り、和珥氏

岩下 均

HITOSHI IWASHITA

1.

十五代応神天皇の皇子であつた菟道稚郎子（『日本書紀』。「古事記」では「宇遲能和紀郎子」、『万葉集』では「宇治若郎子」、『播磨国風土記』では「宇治天皇」とも記す^{注1}）は、父帝の鍾愛によつて皇太子に立てられた。しかし、それを不服とする長兄大山守命を、宇治川に溺死させることで退けたが、その後、次兄大鷦鷯尊（十六代仁徳天皇）とは皇位を譲り合い、ついに即位しないまま亡くなった（『日本書紀』では自殺）と伝える。戦勝者の皇位委譲、自殺は、あまりにも不自然であるが、「長幼の序」を重んじるといふ儒教思想に基づき説話化とされている。

宇治川に沈んだ大山守の屍は、那良山（『紀』では那羅山。奈良

県と京都府の境に連なる丘陵地帯。『陵墓要覧』には奈良市法蓮町字境目谷とする。民間伝承では、大和平原を見下ろす若草山の頂にある「鶯塚」と呼ばれる前方後円墳がそれと伝える）に葬られたとある。

一方、そのウヂノワキイラツコの陵墓について『延喜諸陵式』には「宇治墓。菟道稚郎皇子。在山城国宇治郡。兆城東西十二町。南北十二町。守戸三烟」とある。すると、南北十二町とは一七〇ヘクタールあまりになり、世界最大の仁徳陵よりも大きいことになる。そこで宇治の東に聳え立つ朝日山全体が陵墓かとも言われるのだが、一方、『陵墓要覧』には「京都府宇治市菟道丸山」と記し、宇治川のほとりの小さな御陵をそれに比定している。

後年、物語世界ではあるが、『源氏物語』第三部にあたる宇治十帖で、ヒロイン浮舟は、宇治川に入水自殺したものと考えられた。これらを考え合わせると、「宇治」という地には、何か「入水」に纏わるような民俗的伝承背景があったのではないか。これが拙稿の直接的な考察動機である。

二、

長兄オホヤマモリが、「天皇の命に違ひてなほ天下を獲むと欲ひて、その弟皇子を殺さむの情」(『記』)を持ったのは、応神天皇が百三十歳で亡くなった時であった。これは家督相続が、中国の儒教思想から、長子相続を意識するようになったことと無関係ではあるまい。津田左右吉は、応神天皇の時代に儒教が伝来したと記されていることと対応するものとし、この説話が作られたのも、儒教思想が広まったと思われる大化の改新(六四五年)以後のことであろうとする。しかし、それまでの古代日本にあつては、末子相続がむしろ普通であつたかと思われる。その徴証は、ニニギの御子であるホデリ(海幸彦)・ホスセリ・ホヨリ(山幸彦)の三子のうち、相続したのは、末子の山幸彦であつたこと、その御子ウガヤフキアエズの場合も、イツセ・イナヒ・ミケヌ・イワレヒコのうち、結果的に相続したのは、やはり末子のイハレヒコ(初代神武天皇)であつたと伝承することなどである。

ウヂノワキイラツコの場合は、御子の中でこの子を最も愛し、皇

位を譲ろうと考えるようになった天皇が、御子のオホヤマモリとオホササギを呼び、「年上と年下のうちどちらが可愛いか」と尋ねたという牽合が見られる。年長のオホヤマモリは「年上の子」と答えたが、オホササギは天皇の心中を察して「兄の子は既に人と成りぬれば、これいぶせきこと無きを、弟の子は未だ人と成らねば、これぞ愛しき」(『記』)と答えたので、喜んだ天皇は「大山守命は山海の政せよ。大雀命は食国の政を執りて白したまへ。宇遲能和紀郎子は、天津日継を知らしめせ」(『記』)と、ワキイラツコを皇太子に、オホササギを太子の補佐役につかせたとある。

さて、天皇が崩御すると、オホヤマモリの太子殺害計画を知った次兄オホササギは、ひそかにその陰謀を告げる。驚いたワキイラツコは、宇治の山に絹の幕を張り巡らし、舍人を皇子にしたてて呉床に座らせ、自分はみすばらしい舟頭の姿となつて山の前に流れる宇治川で待つ。それに気づかず乗り込んだオホヤマモリは、山上の絹幕の内にワキイラツコがいるものと思ひ、「山の上の大猪を討つのだが、うまくいくか」を問う。舟頭のワキイラツコは、「できないでしょう」と答える。これは誓約狩りであり、神意の結果は、すでにオホヤマモリにとつて「凶」と出たことになる。やがて宇治川の中ほどまで舟が来た時、ワキイラツコは、オホヤマモリを水中に落とし入れる。川のほとりにはワキイラツコの伏兵がいるため、オホヤマモリは岸に近づけず、流されて、ついには溺れ死んでしまう。流れながらオホヤマモリは歌う。

ちはやぶる 宇治の渡りに 棹執りに 速けむ人し わがもこ
に 来む (五一)

「ちはやぶる」は「いちはやふる」の略で「猛威をふるう、凶暴な、勇猛な」から、軍士の「氏」と続き、ウジのほめ言葉として同音の宇治に掛かる、また宇治川の激流を「ちはやぶる」と見て「宇治に掛かる、とする説もある。「神」に掛かるのは、もとは神の和霊に対する荒霊を形容するものであったものが、のちにその区別を失ったものである。「わがもこ」の「もこ」は「婿」の古語で「仲間、味方」の意であろう。結局、訶和羅の崎(未詳。一説に京都府綴喜郡田辺町河原かとする。遺骸を鉤に引っ掛けようとしたとき衣の下の鎧に引っかかってカラカラと鳴ったので、訶和羅の崎、という地名起原説話となっている)まで流れ着いた遺骸を見たワキイラツコは、

ちはや人 宇治の渡に 渡り瀬に 立てる 梓弓檀弓 い伐ら
むと 心は思へど い取らむと 心は思へど 本方は 君を思
ひ出 末方は 妹を思ひ出 いらなけく そこに思ひ出 かな
しけく ここに思ひ出 い伐らずそ来る 梓弓檀弓 (五二)

と歌ったとあるが、「い伐らずそ来る」ということなら「殺すに忍びず帰って来た」ことになり、前文と合致しない。「君」は応神天皇、「妹」は同母妹の大原郎女おほはらのいらつめもしくは高目郎女こむくのということにな

ろう。

「妹」に言い及んだのは、そのうちの一人がワキイラツコの妃であったか(契沖『厚顔抄』『全集』七・岩波書店・一九七四)、あるいはオホヤマモリの妃がワキイラツコに関係があったか(本居宣長『古事記伝』『全集』十一・筑摩書房一九七二)であろうという。

宇治川で溺れ死んだオホヤマモリの墓所は、宇治川のほとりに葬れば近道なのだが、第一章でも述べたように、わざわざ国境沿いのナラ山にまで運び、葬ったと伝える。これはなぜなのであるのか。

『万葉集』には、屍を国境の山上に移葬した大津の皇子の歌が伝えられている。

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時、大来皇女、哀
傷びて作りませる歌二首
うつそみの 人にあるわれや 明日よりは 二上山を 兄弟と
わが見む (巻二・挽歌・一六五)

大津皇子は、天武天皇の第三皇子で、母は皇后鸕野(持統天皇)の亡き姉、大田皇女であった。皇后の子、草壁(日並皇子)が病弱なのに対して、堂々たる体躯であり文・武ともに優れ(漢詩文は大津より始まれり)『懷風藻』、人望を集める皇位継承の有力候補者であった。

ところが、父帝天武が崩御された(六八六)九月九日、皇后が称

制すると、その直後の十月二日、早くも親友河島皇子の密告により「謀反発覚」し、翌日には早くも死を賜る。時に二十四歳であった。

「皇位継承問題」を背景として葬られたオホヤマモリの場合と、よく似ているのである。「二上山移葬」の理由については、すでに論じたことがあるが、「無実の罪」で亡くなったことで、怨霊化しそうな「荒ぶる魂」の力を、国境の山に葬ることにより、外から国中に入ろうとする疫病や邪霊、外敵から守ろうとする、言うなれば、新・道祖神化したもの、と見たい。すると、オオヤマモリの奈良県と京都府の境に連なる「国境沿いの山頂の陵墓」埋葬も、こうした「境を守る神」として祀るという意図があつたことだったと考えられるのではないか。

このオホヤマモリの子孫は「土形君・幣岐君・榛原君」（『記』）であるという。土形は、遠江国城飼郡土形郷（静岡県掛川市付近）、幣岐は日置とも記すので、同じく遠江国城飼郡比木郷（御前崎の北方）、榛原は同じく遠江国秦原郡秦原郷（大井川河口西岸）かと考えられ、いずれも静岡県に土着した豪族となつている点が注目される。

なぜなら、オオヤマモリの母方は、尾張の連、建伊那陀宿禰であり、尾張から三河、遠江に勢力を伸ばした豪族かと思われるからである。

三、

さて、ワキイラツコは、皇位を狙ったオホヤマモリに、こうした策略を用いて打ち勝つたにも拘らず、「皇位は本来、兄が継ぐべき」として、次兄オホササギに即位を促がす。オホササギもまた、父の意思に背くとして辞退し続け、長い間（『紀』では三年とする）、空位のままであった。ために、海人が海の幸の献上に及んでも譲り合ひ、両者を行き来する海人は、大いに困つたとある。そこから諺として「海人や、己が物によりて泣く」という詞が生まれた（『紀』では「海人なれや、己が物から泣く」と記す）とある。海人に関しての諺も、丸邇氏ならではの伝承と思われる。さて、このことが決着したのは、ワキイラツコの若い死によつてであった。『応神記』では「早崩」とあるのだが、『紀』ではそれを、「乃自死焉」と書く。自殺であつたというのである。

応神天皇十五年八月、百濟王に遣わされた阿直岐、十六年壬辰（千字文）『論語』を伝えたという）に、それぞれに太子は典籍を学んだことが記される。その学びで、長幼の序を重んじる行動をとらせたかのような書きぶりであるが、応神二十八年（三六〇）には、高麗王の送つた上表文に「高麗王、日本国に教ふ」とあつたのを、無礼だと破り捨てるようなところもあつたという。

『紀』には、オオヤマモリの倭の屯田・屯倉は、本来、天皇のものであることを裁定できなかったワキイラツコに代わって、オホササギが徹底してこれを調べ上げ、訴え出た大山守の同母兄弟、額田

大中彦皇子の申し出を退けた話を載せる。これは、オホササギがいかに優秀であったかを示すための説話にはかならないであろう。

さらに、ワキイラツコの自殺後の蘇生譚を載せる。すなわち、太子が亡くなったことを聞いたオホササギは、難波の宮から急遽、菟道宮に駆けつける。すでに死後三日目であったが、髪を解き、屍体にまたがって、三度「我が弟の皇子」と呼ぶ。これは当時の招魂儀礼の方法だったのである。すると太子は、いったん蘇生したと伝える。しかし、太子は、あらためて即位を依頼し、同母妹の八田皇女（ウヂノワキイラツコの母、宮主宅媛の祭司を正当に受け継ぐ皇女か）を奉り、息を引き取ったという。実は、オホササギにとつて八田皇女と結婚することが王権を引継ぐためにも必要だったからではないか。オホササギは麻の白服を着て悲しみ慟哭し、亡骸を菟道の山上に葬ったと伝える。命を自ら絶つたのであれば、その追悼と鎮魂の意味からも、広大な領域の陵墓がいとなまれたであろうが、『延喜式』諸陵式の記す陵墓は未発見のままである。

『詞林采葉抄』一に引く『山城国風土記』逸文には、

：宇治と謂ふは、軽島の豊明の宮に御宇しめしし天皇（応神天皇）のみ子、宇治若郎子、桐原の日桁の宮を造りて、宮室と為したまひき。御名に因りて宇治と號く。本の名は許乃国と曰ひき。

とある。『山州名跡志』には、宇治川の東岸の離宮、宇治神社を

その遺跡地と伝える。宇治の民間伝承では、ワキイラツコの住居跡を、兄の仁徳天皇が神殿に改めたもの、と伝える。『神道大辞典』

（臨川書店・一九八六）には、「府社」で、「菟道宮主矢河枝姫の祖神及び稚郎子尊を祀る」「宇治鎮守明神」ともいう。「宇治上神社（村社。応神天皇・菟道稚郎子・仁徳天皇を祀る）を本宮又は上社」というのに対し「（宇治）若宮」「下社」とも呼ぶとある。また、上と下を合わせて「離宮八幡宮」（『都名所図会』）とする。やがて延喜の制で「旧官幣小社」に列し、さらに後冷泉天皇治暦三年（一〇六七）十月五日平等院行幸に際し「離宮明神」に「神位一階」を捧げたとある（『神道大辞典』）。平等院鳳凰堂を営んだ藤原頼道は、この神社を鎮守としている。境内左手の木立の中をさらに進むと、宇治上神社があり、本殿（国宝）は、現存する神社建築中最古のものといわれる。拜殿も旧宇治離宮を移転したもの（国宝）といわれる。境内には「宇治七名水」の一つ「桐原水」――まさにワキイラツコの桐原日桁宮址――が、今も滾々と湧き出ている。そして『源氏物語』宇治における八の宮邸のモデルも、ここに擬せられるのである。

なげきわび 身をば捨つとも 亡き影に 憂き名流さむ こと
をこそ思へ

：明けたてば、川の方を見やりつつ、羊の歩みよりもほどなき心地す。：

からをだに 憂き世の中に とどめずは いづこをはかと 君

もうらみむ

〔源氏物語〕「浮舟」

いよいよ浮舟が、この宇治上神社の邸を抜け出で、宇治川入水を決意した場面である。

『万葉集』には「宇治若郎子の宮所の歌一首」を伝える。

妹らがり 今木の嶺に 茂り立つ 夫松の木は 古人見けむ

⑨ 挽歌・七九五 柿本朝臣人麻呂歌集

「妹らがり」は、「妹のところへ」。今木に掛けた枕詞で、「今木の嶺」は未詳とされるが「挽歌」の部立巻頭に置かれることから見て、ほかならぬワキイラツコのことを詠んだものであり、その離宮付近の朝日山（在宇治彼方町東南。今日離宮山）『山城志』であろう。

『紀』の伝える蘇生譚からすると、かつてワキイラツコが長兄オホヤマモリを、船頭に姿を変えて宇治川に誘い、溺れさせたように、太子もまた、宇治川に入水自殺を試みたものではなかったろうか。それゆえ一旦は蘇生したとも伝えるのではないか。そこで、宇治川のほとりに、その御陵が造られたものと考えてみたい。民間伝承では、自殺したワキイラツコを、仁徳天皇が悲嘆のうちに宇治川のほとりに葬った、とも伝承しているからである。ワキイラツコの離宮跡とされる宇治神社の北方、宇治橋の下流200メートルの川

岸右側に接するように「宇治墓」の陵墓がある（宮内庁の比定）というのも、入水自殺であったように思わせるのである。さらに次のような民俗の存在が気になるところである。

四、

対岸、宇治平等院の近くにある県神社（旧村社『神道大辞典』は天台宗平等院の鎮守社として、後冷泉天皇永承年中（一〇四六—五三）摂政藤原頼道の勧請という。この県神社で、毎年六月五日の深夜から六日未明に行われる「梵天まつり」が奇祭「くらやみ祭り」として名高い。境内の一隅には常時、金色の御幣を付けた金属製の「梵天」が飾られている。しかし、安永九年（一七八〇）秋里籠島によって書かれた『都名所図会』^{注2}には、「例祭は五月五日夜、神輿一基あり。」と記すのみである。竹村俊則は「五月五日夜」に注を付け、「今は三月五日。県祭は六月五日の夜に行われる。」とすから、梵天祭りは、後に（明治年間か）加えられた祭りであろう。

梵天とは、インドの梵天（世界の創造神）とは無関係で、目印を立てる「ほて」に結びついたかと思われる。^{注3}長さ八尺の奉書紙千六百枚で作った大きな御幣であり「神の占有を表示する斎串」^{注4}であろう。深夜十一時になると、すべての灯りが消され、暗闇の中、獅子頭を先頭に、白い直径一メートルほどの梵天を乗せた神輿が、途

中、激しく回転させながら（「ぶん回し」という）県神社を出発、一キロ程離れた宇治神社お旅所まで運ばれる。この「宇治暗闇祭り」は、なぜ宇治神社のお旅所まで行くのであろうか。

その起源について、大阪での民間伝承では、仁徳天皇が河内の日照りに困り、ウヂノワキイラツコの魂に呼びかける「雨乞い」のために始まった、と伝えている（御幣講天王子組）。拙稿の仮説のよみに、もしもウヂノワキイラツコが宇治川に入水自殺したのであれば、ワキイラツコは「宇治川の水を司る竜神に化した」と思われるので、いかにも「雨乞い」の対象者にふさわしいことになる。

少し下るが、天平感宝元年（七四九）閏五月六日からその月末まで早天が続いたとき、越中国守大伴家持は、長歌の末尾で「…あしひきの 山のたをりに この見ゆる天の白雲 海神の 沖つ宮辺に 立ち渡り との曇り合ひて 雨も賜はね」（万葉集卷十八・四一二二）と詠んでいる。これは国守としての《雨乞いの祝歌》であったのだから。さらに、皇極天皇元年（六四二）の早天には「村々の祝部の所教の随に或は牛を殺して諸の社の神を祀る。或は頻に市を移す。或は河伯を祈る」（『紀』）とある。これは近代の雨乞の民俗でも、河川に牛の血や汚物を投げ入れる、あるいは人間たちが入って水を濁すなどの狼藉行為をし《水神の怒りを買う》ことに通じるものであり、こうした行為で雨を降らせようとする民俗の報告は、全国的に多く見られるところである。

実は、梵天暗闇祭り、梵天祭りの主役は宇治の氏子ではなく、天王寺組・河内組・守口町など河内国の御幣講、すなわち大阪府を中心とする奉賛会などが中心となつて奉仕していた祭りであった。しかし、二〇〇四年からは、彼ら河内の雨乞い梵天と、県神社の梵天の二つが繰り出されるように「変化」したという。奇祭「暗闇祭り」が消灯とあいまって男女の雑魚寝となり、風紀を乱すことが人口に膾炙、有名になると、県神社の祭祀支配が強調されたゆえであろう。

県神社の由緒書には、ご祭神は木花開耶姫こんはなひらくやひめこと鹿蘆津比売命あしつひめののみことであり、例祭は五月五日（今の三月五日）夜であったが、さらに「梵天渡御」が加えられたのである。一年に一度、六月五日から六日の未明に、コノハナサクヤヒメがウヂノワキイラツコに会いに行くもの、と伝える。オホヤマツミの神の娘で、ニニギの命の妃となったコノハナサクヤヒメと、大きく時代の離れた子孫でもあるウヂノワキイラツコとの逢瀬は、あたかも七月七日七夕の織姫・彦星のようである。

七夕は「棚機」であり、夏秋ゆきあいの時期に水辺にさし掛けた棚の上で、まれびと神の訪れを待つて機を織る女性がタナバタツメであった。中国に発した技芸上達を願う「乞巧典」である七夕は、民間に伝承が及ぶと、次第に「七夕送り」（静岡）、「七夕流し」（八丈島）、「眠り流し」（長野）、「ねぶと流し」（群馬）、「ねぶた」（青森）、など、日本の民俗に習合吸収されて日本化する。すなわち、《七夕飾りを川に流す》《川で水浴》《川で髪を洗う》などが、併行

して行われてきたのである。その本質は「盆祭の物忌・みそぎから転化したもの」（柳田國男『年中行事図説』一九七五 岩崎美術社）に他ならないと思われる。したがって、一年一度の織姫・彦星の逢瀬の日であるからと「照照坊主」を作って晴天を願う子どもたちの姿も多く見られるが、大人たちは、七夕の日に一粒でも「雨を乞う」（＝盆の前の禊の意味であろう）民俗も、また多いのである。

さて、六月八日には、「宇治祭り」「離宮祭り」といわれる宇治神社の大祭「大幣神事」がある。一ヶ月前の五月八日に宇治神社から神輿がお旅所に渡される（「御出」^{おいで}）。ウヂノワキイラツコの神霊である（ろう）。お旅所は町の西部にあり、五月十日に「御戸開き」がおこなわれ、旧四月中の卯の日、一卯の日というのも菟道稚郎子にふさわしいではないか、上林家の茶師の家から「長者の御籠灯」（＝仏壇の灯）が奉られる。『神林家前代記録』によると、近世中期頃には「宇治離宮正一位太神」との関係が深かったが、近世後期になると、県神社が直接関与するようになった（『県神社文書』と、明確に記す。すなわち、これを今では「県神社の祭り」と記すものもあるが、正しくは宇治神社の祭礼と見るべきであろう。『都名所図会』でも、「離宮八幡宮」の例祭「五月八日」と記している。

祭りに先立って、宇治川岸亀岩の後ろの山から松の木三本（五メートル程）を伐り、上端にそれぞれ笠をつけ、三本のもとの方は交差してその基部に長方形の枠をつくり、周囲に数百枚のシデを垂らす。これを中心として、県神社前の幣殿から宇治神社のお旅所（宇

治神社境外撰社^{またかのやしろ}社）まで、行列が組まれる。この行列には、子どもを務める「お下駄持ち・傘鉾」なども加わる。宇治神社お旅所では、白装束・シデを垂らした笠を被ったヒトツモノの「馬駆け」もある。再びお旅所から幣殿までの道を戻ると、幣殿前で、「梅の実」^{みはじ}と「ワカメ」（第六章「宇治の橋姫」の項参照）とを、この大幣に供える。そのあと急に地面にそれを倒し、ツナをつけた（大幣にふれると祟るといわれる）数人（幣座の人々）がこれを宇治橋まで引つ張っていき、それをめっちゃめっちゃに壊すと、橋の上から川中に放り込み、あとを見ずに帰る。その後、お旅所から神輿は橋を渡って県神社に戻る。この次第は「タナバタ流し」に良く似ている。

明治時代に始まったらしい「梵天まつり」も、この宇治神社における「宇治離宮正一位太神」の祭りが、やがて県神社の祭礼のようになったときに、さらに河内からの雨乞い祈願として、類似の「梵天渡御」も加えられたもの、と考えてみたい。なお、県神社の梵天祭りでは、梵天の御幣は終了後に「御札」として人々の手に持ち帰られるが、宇治離宮祭りの「大幣」は、触れることも許されないといい点に、大きな意味の違いがあると考えられる。

すなわち、神林家古文書の記すように、その大本にあったのは、宇治離宮の主「ウヂノワキイラツコの祭り」であったということになる。あたかも大幣は「タナバタ流し」のような扱いであり、「川の中に放り込む」というのも、ウヂノワキイラツコの「入水」のようなしぐさである。「正一位太神」（太は「太公」「太君」と同

じように貴神に対する尊称であろう)は、また「正一位菅原天神」「正一位柿本人丸明神」のような《御霊》として祀るゝ大幣に触れると崇るゝ、といったニュアンスがあつたからではないか。「ヒトツモノの馬駆け」は、崇徳天皇長承二年(一一三二)五月八日の新宮祭で競馬がわれたことによるもの、と思われるが、おそらく「葵祭」の「賀茂の競馬(くらべうま)」のような、一種の古い神事であろう(モノは精霊なのではないか)。ヒトツとは何であるだろうか。想像をたくましくすれば、あるいは宇治神社には、非公開、秘蔵の菟道稚郎子の等身大坐像が祀られているという。馬駆け、あるいは神輿渡御に、かつてはこの御神像が乗せられ、運ばれた時代があつたのではなからうか。そしてこの悲劇の太子には、実は「聖帝」仁徳ゆえに隠されてきた背景(たとえば、仁徳天皇による自殺への「無言の強要」「暗殺」など)があつたのではなからうか。なぜなら、オホササギには、次のような側面が見られるからである。

- ① 父の妃となるべき日向国諸^{もろがたの}君^{きみ}女^{むすめ}、髪長比売^{かみながひめ}を、建内宿禰^{たけうちすくね}大臣^{おほみ}を介して手回しのうえ、強引に手に入れている。
- ② 父の気持ちを汲んでウヂノワキイラツコを太子に薦め、「い皇子」を演じて感激させ、太子の補佐役を手に入れる。
- ③ オホヤマモリの拳兵をいち早く知らせただけで、自分は争いの外に身を置き、そのなりゆきをじっと待っていた。
- ④ 最後はウヂノワキイラツコの死で、仕方なく天皇になったように喧伝されるが、「漁夫の利」であるといえる。

⑤ 「民の竈」の国見説話で国民の暮らしを思いやり、後代まで聖帝と仰がれるが、かたや現実の仁徳大仙陵は、天皇生前から営まれた「寿墓」で、世界一の大きさである。

以上、いかにもそつがないオホササギの行動、策士めいた行動が非常に気になるところである。ともかくこうして、やむなくオホササギは皇位に就くのである。

大平裕は、ワキイラツコの自殺の背後には「宇治のあたりも拠点の一つにしていた和邇氏と、五百城入彦や葛城氏につらなる勢力との相剋があつた」「もともと難波宮の大鷦鷯尊に対して軍勢を差し向けるといった強い意志はなのまま、圧倒的な力の差により自害に追い込まれたのではないか」「宇治の地は、交通の要衝でもありましたが、後世は貴族の保養地で別荘が建ち並んでいた土地柄でもあり、事実上、当時の枢要の副都でもあつた難波宮とは争いにもならなかつたのではないでしょうか」と述べている。河内の豪族や、葛城・紀・平群・巨勢の豪族を背景とするオホササギに対して、かたや大和の和珥一族では、とても勝ち目はないと思えたことであろうから、十分説得力のある説である。しかし、その場合でも、拙稿の《入水自殺説》は、十分考えられるのではないだろうか。そう考えたとき、あるいはオホヤマモリが宇治川を流れ、溺れて亡くなる時の歌謡も、本来、ウヂノワキイラツコ自身の歌として伝承されていたものかもしれないとも思われてくるのである。

皇位を拒んだ空位三年について、『古今和歌集』仮名序には、「難波津の歌は、帝の初めなり。大鷦鷯帝、難波津にて皇子と聞こえける時、春宮をたがひに譲りて位に即き給はで三年になりければ、王仁といふ人のいぶかり思ひて、奉りける歌なり。」（紀貫之・延喜五年九〇五）とある。すなわち、

難波津に 咲くやこの花 冬ごもり 今は春べと 咲くやこの花

という歌であり、「そへ歌」（＝暗喩）の例であると、仮名序は後述している。すると、王仁は、儒教的見地から暗にオホササギに即位を促したものであるということになる。『源氏物語』若紫巻には、この歌を幼児でもよく知っている歌、手習い歌であると、と述べている。

なお、『播磨国風土記』揖保郡の条には、「宇治の天皇の御世、宇治の連等が遠祖、兄太加奈志・弟太加奈志の二人、大田の村の奥富等の地を請ひて、田を墾り時かむと来る時云々」とある。「宇治の天皇」とは、ほかならぬウヂノワキイラツコのことである。『風土記』校注者秋本吉郎は「日本書紀によつて天皇の御歴代が確定する以前の称によつたもの」とする。『記』は「早崩」という字を使うが、これも天皇の崩御に準じた表記で、『風土記』と対応している。なお、宇治連については、「物部氏と同族で、本拠地（京都府宇治市）による氏の名であろう」と注している。

五、

古代にあつても、天皇家では母方の勢力情勢がしばしば皇位継承に影響を与えたと考えられる。この点から、さらに考察をしてみよう。

オホヤマモリの母は、妃高城入姫（『記』には品陀真若王の女である。五百木之入日子命が尾張連の相建伊那陀宿禰の女志理都紀斗売を娶つた子とあるから、景行天皇の皇子）である。

オホヤマモリの治めることになった「山海の政」とは、山部・海部の管理者であろう。応神天皇の事業として「この御世に海部・山部・山守部・伊勢部を定めたまひき。」（『記』）とあるから、「大山守」の名も、このことと無関係ではあるまい。オホササギの母は、その高城入姫の妹で、中津日売にあたる。『紀』に、二年三月にこの仲姫を立てて皇后とした、とあるが、『記』にはそのことは記されていない。

一方、末子ウヂノワキイラツコの母は、和珥臣の祖日觸使主（『記』丸邇之比布礼能意富美）の女、名は宮主宅媛（『記』宮主矢河枝比売）である。『記』では、天皇が、淡海国行幸の途次、宇治野（宇治川北岸の宇治市の野）で姫とあつた次第を「御歌（みうたよ）みしたまひしく」として伝える。

この蟹や いづくの蟹 百伝ふ 角鹿の蟹
横去らふ いづくに到る 伊知遅島 み島に著き
みほどりの かづき息づき しなだゆふ 佐々那美道を

すくすくと わがいませばや 木幡の道に 遇はしし嬢子をとら

後ろでは 小楯ろかも 齒並は 椎菱なす

櫛井の 和邇坂の土を 初土は 膚赤らけみ

底土は 丹黒きゆゑ 三粟の その中つ土を

頭著く 真火には当てず 眉画き こに画き垂れ

遇はしし女 かもがと わが見し子ら

かくもがと あが見し子に

うたただに むかひをるかも いそひをるかも

かく御合いまして、生みたまへる御子は、宇遲能和紀郎子ぞ。

応神天皇は、食膳に饗された蟹を取り上げて歌い出しているが、
 応神天皇の「妻問い歌」である。おそらく和珥氏に伝承された服従
 帰属礼歌であろう。「櫛井の和邇坂の土」とは、奈良県天理市櫛井本
 町で、和珥氏の本拠地である。木津川水系から琵琶湖を経て敦賀へ
 の交通上の要衝を管掌し、海産物を貢上する水の霊「和珥」を名乗
 る氏族であり、以下のように、多くの女性を後宮に入れた大豪族で
 あった（『紀』は春日和珥臣の分かれとして十六氏を記す）。

六代孝安天皇（前三九二～二九二）の妃押媛命が生んだ七代孝靈
 天皇（前二九〇～二二五）、九代開化天皇（前一五八～九八）の
 妃姥津媛、十五代応神天皇（二七〇～三一〇）の妃宮主宅媛の生ん
 だ菟道稚郎子、矢田皇女は一六代仁徳天皇（二二二～三九九）妃
 に、同じく応神天皇の妃袁那弁媛の生んだ雌鳥皇女、この皇女も仁

徳天皇に嫁する予定であったが、媒に入った隼別皇子と通じてし
 まう。宇遲之若郎女も仁徳天皇の妃となっている。二十一代雄略天
 皇（四五六～四七九）の妃として春日和珥深目の女童女君の生んだ
 春日大娘皇女は二十四代仁賢天皇（四八八～四九八）の皇后となり
 橘皇女と手白香皇女を生む。仁賢天皇にはまた和珥日爪臣の女
 糠君娘が嫁ぎ、春日山田皇女を生む。春日山田皇女は二十七代安
 閑天皇（五三一～五三五）の皇后になっている。手白香皇女は二十
 六代継体天皇（五〇七～五三二）皇后となり、橘皇女は二十八代宣
 化天皇（五三五～五三九）皇后となっている。継体天皇はまた和珥
 河内の女薨媛がみえる。また、春日仲君臣の女、老女子郎女は三
 十代敏達天皇（五七二～五八五）夫人となっている。このように、
 和珥氏は、真偽はともかく、紀元前四世紀から六世紀後半の長期に
 わたって、多くの后妃を輩出した氏族であった。和珥下神社にある
 四世紀後期頃の前方後円墳は、和珥氏の墳墓であるのだろう。境内
 にはその支流である柿本氏の氏寺、柿本神社跡も伝えられる。のち
 の春日小野臣、春日粟田臣などの復姓は、本拠地を添上郡和珥から
 同郡春日に移動したためであろう。和珥氏から春日臣へ、その同族
 として、新羅征討副將軍大宅軍（推古三十一年六二三）、万葉歌人
 の柿本人麻呂、遣唐執節使粟田朝臣真人（大宝元年七〇一）、墓誌
 名の発見された小野毛人などが活躍したが、八世紀後半には衰退し
 てゆく。一方、葛城氏の婚姻時期は五世紀代であり、蘇我氏は、六
 世紀後半から七世紀にかけてである。

さて、先の「この蟹や」の歌謡について、西宮一民は、宮主矢河

枝比売の名からも察せられるように、「水・の・巫・女」としての性格があり、したがって応神天皇との結婚は『聖婚』ともいふべき特質をもつ。^注と述べている。宇治に宮を営んだウヂノワキイラツコは、そういう「水の家柄」の背景をもつ皇太子であったのである。

六、

交通の要衝であった宇治に、日本最古の橋といわれる宇治橋が架けられたのは大化二年（六四六）であるという（『日本霊異記』上巻）。

『古今和歌集』（小町谷照彦訳注『古今和歌集』一九八二・旺文社）には、

題知らず

よみ人知らず

さむしろに 衣片敷き 今宵もや 我を待つらむ 宇治の橋姫
または、宇治の玉姫。 (⑭恋四・六八九)

の歌を伝える。

「さむしろ」は狭い筵であろうが「寒し」を響かせていると思われる。「橋姫」とは、橋を守る明神で、近江瀬田の唐橋、摂津の長柄橋、新五条松原橋などもよく知られている。長柄橋では人柱として河に沈められた者であった。柳田國男は、子どもを連れた女性が自ら人柱に立って神に祀られる例が多いとして、その理由を水辺

の神祭を司った巫女が母子神信仰を広めたと推定する。^{注17}

『古今為家抄』は、『山城名勝誌』にある宇治の土地の者からの伝承として、竜宮に捕らわれた夫を恋うる悲しみのあまり宇治橋のもとで死んでそのまま神になった妻の話を、橋姫明神の由来として所載する。「竜宮に捕われた」というのは、「つわりで七色（＝七尋^{ななひろ}である）の若布を欲しがると妻のために探しに海辺に行ったとされる。宇治神社の六月八日の大幣神事でも「若布」を付ける点を見ると、この宇治川で亡くなった、という意味ではないのか。宇治橋の向こう・川の主流は海（異郷）であり、橋のたもとで待ちわびて亡くなったとする。そこで道祖神のように、その男女二神を、「境としての橋」に祀って、外部から進入する邪悪な神霊を防いだのである。やがて『奥義抄』『顕註密勘』などの歌学書は、宇治橋の下に住む女神「橋姫」のもとに、橋の北に住む「離宮」という神が夜毎に通う話を紹介している。『袖中抄』ではこの神を住吉明神（＝海上守護の神。後には和歌の神）としているが、「川波の激しい夜は、宇治神社の神が、橋姫のもとへ通うのだ」という民間伝承があるの、宇治神社の祭礼から考えても、宇治離宮の菟道稚郎子であったのではないか。

男を「待つ女」の姿は、当時の婚姻形態の常であったから、男がほかの女性に心を移せば、当然、女の「嫉妬」となる。謡曲『鉄輪』も、『葵上』も『道成寺』もそうであるが、市井の名もない女性の嫉妬であれば、一層強烈で凄愴な結果になる。こうして「宇治の橋姫」は次第に「妬深い鬼人」とされるようになる、「橋姫の

ねたみ」を恐れて、花嫁行列は、この橋を避ける民俗にもなったという。現在の宇治橋は、昭和十一年の建造であるが、橋姫明神は、元は宇治橋の上流に突き出た三の間に祀ってあったという。豊臣秀吉は、橋守の通円に、ここから汲ませた水を伏見城まで運ばせた（「通円茶屋の起源」という。今も十月初旬に行われる「茶まつり」には、古式床しく、釣瓶で水を汲み上げている。近世には宇治茶師、上林味下郎の宇治橋西詰に橋姫明神は遷され、上林家の管理とされた（『上林家前代記録』）が、明治三年（一八七〇）の洪水で流失したため、現在の宇治蓮華町に再興された。しかし、やはり土地の者は現在でも、橋姫社の前を花嫁行列は通らないようにしているという。御神像は、緋の袴を付けた裸形の鬼女で、左手に蛇を、右手に釣り針を持った坐像であるという。

高崎正秀は、催馬楽「山城」の「山城の狛のわたりの瓜作り……」の研究から発して、「水界の霊が人の子の処女に夜な夜な通ふ譚」におよび、「瓜に関する好きがましい」連想はいつまでも生きていて、民謡化していった次第を検証している（「古謡雜俎」『文学以前』所収）。

さらに「この地に勢力のあった宇治大領家宮道ノ臣の語部連の語り」として、その宮道氏の血脈を受け継ぐ紫式部によって「紫の語り」ともいうべき『源氏物語』の「浮舟」や「夕顔」――蔓になる瓜の同類――が書かれた必然性は、すなわち、ヒロインたちが『水の女』であり、『源氏物語』は、『伊勢物語』と同様『稗の文学』であるからとする。

小林茂美は、高崎正秀の示唆を具体的に検証し、紫式部の母系と氏族伝承質の継承的展開を試みたが、今は紙面も尽きたので、別の機会に検証することとしたい。

【注記】

- (1) 次田真幸『古事記』上・中・下・講談社学術文庫・一九八〇
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注『日本書紀』上・下
日本古典文学大系・岩波書店・一九六五―一九六七、秋本吉郎校注
『風土記』日本古典文学大系・岩波書店・一九五八。
櫻井満『現代語訳対照万葉集』(上)(中)(下)旺文社・一九七四―
七五。
- (2) 秋里籠島の『都名所図会』には「朝日山は離宮の後山をいふ。菟道・導・陵、朝日山観音。この山腹にあり。」と明確に記す。竹村俊則校注『都名所図会』角川書店・一九七八。
- (3) 津田左右吉『日本古典の研究』岩波書店・一九四八。
- (4) 阿部猛ほか『改訂版 歌枕辞典』同成社・二〇一〇。
- (5) 尾崎暢映『古事記全講』加藤中道館・一九六六。
- (6) 西宮一民『古事記』新潮日本古典集成・一九七九。一説としてカラは、「甲冑」作りの部民の住んだ地名ではないかとする。
- (7) 岩下均『万葉集の民俗と二上山―折口信夫『死者の書』の背景―』季刊河川レビュー No.134・新公論社・二〇〇六。
- (8) 高崎正秀は「后妃を奉る家が、尽く水の霊威に関する家柄であった」（「出雲系文化の東漸」『文学以前』桜楓社・一九五八）と述べ、皇位継承には、折口信夫のいう『水の女』の後妃との婚姻（『全集』二巻・中央公論社・一九七二）が天皇には必要であったから、とみている。岡田精司は、難波で施行された宮廷祭祀の「八十鳥祭」を見るのと、海人を支配した河内大王家の祖、応神天皇が大和へ侵攻して崇神

- 王朝を圧倒し、「天皇位を継承」するためには、婚姻が必要なことであつたであろう、と述べている(『古代王権の祭祀と神話』塙書房・一九七〇)。
- (9) 小島美子ほか監修『祭・芸能・行事大辞典』上・朝倉書店・二〇〇九。
- (10) 柳田國男「柱松考」『定本柳田國男集』十一卷・筑摩書房・一九九〇。
- (11) 岩下均「紅幣踊りと雨乞い」『大和神社の祭りと伝承』桜楓社・一九八八。
- (12) 文化庁監修『日本民俗芸能辞典』第一法規・一九七六。
- (13) 「梅若様」「梅若ごと」「コト祭り」(仙台)、「梅若忌」(東京)、「コト追いまつり」(山陰・近畿)として、謡曲『隅田川』のような美童の供養故事を語るころは多い。旧暦三月十五日頃の行事であるが、「人形送り」「病送り」とも称している。茨城県五浦では、お姫様の舟が海に転覆、溺死体が磯に漂着した日とする。「若布と梅」をつけた大幣を川に流す神事も、こうした「病送り」と「溺死」御霊の供養を背景として「梅」の実がつけられるのではないか。
- (14) 大平裕『暦で読み解く古代天皇の謎』株式会社PHP研究所・二〇一五。
- (15) 櫻井満は、「和珥氏の支族」である人麻呂の本貫地は大和の内であらうと思うが、琵琶湖の西岸、志賀町(旧和邇村)小野に式内社小野神社があり、一族の氏神として春秋の祭りなど、おもむく機会が多かつたとみられる。柿本族人はこの小野神の信仰を持って巡遊したというのが折口説である(全集九卷)。人麻呂は巡遊伶人の家に生れ、持統朝に舍人、宮廷歌人として奉仕し、石見国属官として没したのかもしれない。『現代語訳万葉集』(上) 旺文社・一九七四、「作品の解釈と鑑賞」とする。
- 柿本人麻呂は、讃岐の狭岑島の磯辺の行路死人を悼んで「波の音のしげき浜辺を しきたへの 枕になして」(②二二〇)と歌い、その直後に、石見国での自身の行路死に関する自傷歌、妻依羅娘子の人麻

呂への挽歌「今日今日と わが待つ君は 石川の貝に交じりてありといわずやも」(②二二四)などを伝えている。しかし、これも和珥氏の血を引く人麻呂の《水の鎮魂儀礼》を背景とした創作芸能歌であつたのではないだろうか。

- (16) 岸俊男「ワニ氏に関する基礎的考察」『日本古代政治史研究』塙書房・一九六六。しかし、葛城氏や蘇我氏のように、和珥氏が外戚として権勢を振るつた伝承は見えないのはなぜか。平野邦雄は、和珥氏や息長氏は「天皇の皇親氏族」だつたのではないかとみているが(『継体朝の諸問題』『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館・一九八五)、天皇の後妃、あるいは祖母として、聖水をもつて宮廷祭事を行う高級巫女的な存在が必要な時代だつたと考えてみるのはどうか。卑弥呼とその弟の関係のように、である。後世、中臣氏(藤原氏)独占となつていったものか。

(17) 柳田國男「一つ目小僧その他」『定本柳田國男集』五卷・筑摩書房・一九六二。

(18) 尾崎秀樹・駒敏郎『伏見宇治』保育社・一九七四。

(19) 高崎正秀『説話物語序説』『源氏物語論』著作集第六卷・桜楓社・一九七一。

(20) 小林茂美『紫式部論序説』『源氏物語論序説』桜楓社・一九七八。

(平成29年1月17日受理)